



人間牧場主・年輪塾々長  
若松 進一

## 一歩前・少し前、 もつと前へ

### 障害者に温かい心を

私が初めて障害者と関わったのは、青年団活動をしていた二十三歳の頃でした。愛媛県社会福祉協議会に勤めていて、ボランティア活動に詳しくあった楠野さんとひよんなことから知り合いとなり、松山市内のある障害者施設へ「ボランティア活動に参加して欲しい」と誘いを受け出かけたのです。障害者へのボランティア活動がどんなものかも分からぬまま、当時漁師をしていた私は、少しお洒落なよそ行きのカジュアルな服装で他の二人とともに出かけました。そこには私たちが日ごろ目にするのではない、障害を持って生まれた子どもたちが沢山いて、人懐っこい笑顔で私たちを迎えてくれたのです。見学のつもりの軽い気持ちで出かけたのに、施設の人は私たちにエプ

ロンを渡し、いきなりお世話をしよう頼むのです。私たちも気がつけばその気になって、一生懸命障害者のお世話をしていました。折角いい服を着て行ったのに、いつの間にかエプロンも洋服も汗とよだれと鼻水がべっとりついて、とてもそのままでは帰れないほど汚れに汚れてしまいました。

その時知り合った子どももすっかり意気投合して、「進ちゃん(私)」「誠ちゃん(子ども)」と呼ぶ間柄となり、私はその後、1ヶ月に1回のペースで3年間その施設へ通ったのです。3年余り経ったある日、施設の人が誠ちゃんが亡くなったと電話してくれました。私は施設の人に誠ちゃんの家の住所を聞き出し、まだ車の運転免許を持っていなかったため、列車やバスを乗り継いでヒマワリの咲く山道を登ってお葬式に参列しました。お父さんは棺に入った子どもを前にして、生まれながらにして障害を持った子どもを、涙ながらに心情吐露していましたが、親の心を察すると私も涙が出て仕方がなく、傷心の気持ちで元来た山道を引き返しました。毎年ヒマワリが咲く夏の頃になると、屈託なく明る

い笑顔で「進ちゃん」と慕ってくれた「誠ちゃん」のことを思い出すのです。

先日偶然にも「誠ちゃん」のお父さんに会いました。市駅の前の街頭に立って募金活動をしていました。しばらくの間立ち話をしました。お父さんは自分が食べるために働かなければならず、止むに止まれぬ事情で施設に子どもを預けたことを悔やんでいるようでしたが、その後定年で仕事を辞めたのを機に、障害者を支援するボランティア



ア活動に参加するようになり、今は若くして亡くなった「誠ちゃん」への罪滅ぼしだと思つて、頑張つているとのことでした。

健全な体に産まれた人にとって耳や目や手足、心臓といった身体や言葉の障害等は本人や家族にとつても、社会の冷たい差別の目もあつて筆舌に尽くし難い苦しみなのです。その苦しみを共有して優しい心を育てるためには家庭・学校・地域の教育の力が必要です。最近では障害を持った子どもも親や子どもが希望すれば、ある程度健全な子どもと一緒に学校へ行くこともでき、自立支援の施設設備も随分整備されてきましたが、まだまだ道半ばといったところのようです。

### 心づかいと思いやり

今年の3月11日、東日本大震災が起こりました。地震と津波に加え福島原発事故という未曾有の災害に多くの人が被災し、復興の足音が聞こえるもののおおきな影を落としています。「がんばろう日本」を合言葉に多くの人の善意が届いています。震災後間もなくはテレビのコマーシャルも自粛気味で、金子みすゞの詩が登場したりして復興の後押しをしていました。その中に「心づかい」と「思いやり」というのがありました。

「心」も「思い」も目には見えません。心は体の一部ではなく脳の働きによって感じる

五感なのです。人間の心には善と悪があつて、絶えずせめぎ合いをしています。心というコップには善という色の水と、悪という色の水が混じることなく存在しています。善の水が多い人は善人で、悪の水が多い人は悪人です。悪いことをしてはならないと心では分かつていても、悪の水が善の水を上回ると悪の方向へ向かいます。さしずめ私は超自我を極めるような極端な善人でも悪人でもないので、何かの拍子に悪の水が多くなると悪人になる可能性が多分にあるのです。

コマーシャルに出ていた「心は見えないけれど心づかいは見える」はけだし名言で、車椅子で坂道を登つている人を見ると、「車椅子を押してあげたい」という気持ちになります。また電車に乗つて座つていて、立っている身重な人や体の不自由な人を見ると「席を譲つてあげたい」という気持ちになります。でもいくら心があつても、それを使わなければ心は人の目に触れることはないのです。車椅子を押す、席を譲る行為を「思いやり」「心づかい」といいますが、心づかいは周りの人の目に触れるといい連鎖となつて社会を良くしてゆくのですね。心づかひも思いやりも最初の一步を踏み出すのには勇気が必要ですが、やつてみると案外楽しく、「ありがたう」の言葉が返つてくるとう最高です。震災を目の当たりにして殆んど日本人は思いの心を持ちました。ワンコインの少ない義捐金やトイレット

ペーパー1つを差し出した協力も、休暇を返上して被災地へボランティア活動に出かけた人の行動も、その心づかひや思いやりが被災した人々をどれ程勇気付けたことでしょう。

### トイレに書かれた言葉

広島の小さな公民館に出かけた時、三つある小便器にそれぞれ「二歩前」「もう少し前」「もっと前へ」と書かれているのを、用を足しながら見た私はハッとしました。何気ないこの言葉は健全者にも障害者にも大切な心の持ち方のようで、障害者も健全者もお互いにこのことを心がけながら、平等の立場で暮らせるような明るい世の中になつて欲しいと願つています。

若い時 ボランティアした お陰かな  
心豊かに 多くの人と  
目に見えぬ 心と思ひ 踏み出せば  
心づかひと 思いやりなる  
一歩前 もう少し前 もつと前  
トイレで学ぶ 三つの極意  
車椅子 乗つて初めて 不自由が  
分かる体験 そこから始め

(若松達一笑売唆呵より)